

北海道方言とハワイ語

「のな」と「がんぜ」、「ヴァナ」と「ハー・ウケ・ウケ」に見るウニへのこだわり

塩谷 亨 (室蘭工業大学)

ハワイ語はハワイ諸島固有の言語でサモア語やマオリ語などと同じくポリネシア諸語というグループに属し、台湾の先住民言語やインドネシア、フィリピンの言語の遠い親戚にあたり、北海道方言を含めて日本語とは系統関係がない言語である。そのため、語順や活用など、日本語とは大きく異なる点が多い。そのように違っていて当然の両言語の間にも興味深い共通点が存在し、その中には、単なる偶然ではなく、地理的・文化的な要因に起因すると考えられるものもある。その一例が、ウニの語彙上の分類である。

北海道方言ではウニの主要な2種類の分類として、エゾバフンウニを「がんぜ」、キタムラサキウニを「ノナ」とそれぞれ異なる名称が与えられている。いずれも標準語であれば「〇〇ウニ」のようにウニの下位分類として表される場所であるが、北海道方言では「がんぜ」と「のな」のようにそれぞれ全く別の独立した語として区別されているのである。ちなみに、英語でも、日本語の標準語と同様に、ウニは一般的に sea urchin であり、様々な種類のウニは～sea urchin のように sea urchin の下位分類として表される。

北海道方言の「がんぜ」と「のな」同様の事例がハワイ語にも存在する。ハワイ語では主要なウニは大きく4種に分類される。細くてとても長い棘を持つ「ヴァナ(wana)」、ドーム状の中心から短くて丸っこい棘が生えていてヘルメットのような形の「ハー・ウケ・ウケ(hā'uke'uke)」、太くてとがっていない短い棘を多く持つ小型の「イナ('ina)」、丸っぽいパイプのような棘が何本も突き出ているような形の「ハー・ウエ・ウエ(hā'ue'ue)」の4つである。このように、いずれも「〇〇ウニ」のようにウニの下位分類としてではなく、それぞれ異なる独立した形の名称が与えられている。

宮岡(1987:154)は「ある分野に語彙による細分が密であればあるほど、そこには当の民族の、より強い関心やかかわりが窺える」と指摘している。ウニといえば、北海道の海のご馳走の代表の一つである。ご馳走として、また商品としてウニへの関心は高いはずである。「がんぜ」と「いな」の語彙上の細分化はそれを反映していると言える。

では、ハワイはどうだろうか。ハワイの民話集に収められた不思議な力を持つ娘とその養父母に関する物語の中で、養父母が朝起きると豪華なご馳走が用意されているのを目の当たりにするというエピソードがある。

「そして彼らは海の様々なご馳走を目にした。オピヒ (カサガイの一種)、ヴァナ、タコ、海藻、ハー・ウケ・ウケ、そして魚。すべて調理済みで塩で味付けされていた。」 Pukui and Green (1995:143)

このように、海のご馳走の中にヴァナとハー・ウケ・ウケの2種類のウニが挙げられている。伝統的にウニはハワイでもごちそうと考えられていたことがわかる。

ハワイでも北海道でもウニはご馳走であり、ウニに対する関心はとて高く、それが語彙上の細分化に反映されていることが伺える。海を隔てた遠い隣国同士の興味深い一つの共通点である。

参考文献

宮岡伯人 1987. 『エスキモー極北の文化誌』. 東京: 岩波新書.

Pukui, Mary K. and Laura C. S. Green. 1995. *Folktales of Hawai'i*. Honolulu: Bishop Museum Press.